

茅盾(沈雁冰)と「牯嶺から東京へ」に関するノート(一) 革命文学論争覚え書(8)

中 井 政 喜

目次

- ・はじめに
- ・自然主義の提唱へ(以上今号)
- ・小説をめぐる問題について(以下予定)
- ・マルクス主義文芸理論の受容
- ・革命文学論争

、はじめに

茅盾(沈雁冰、1896 - 1981)⁽¹⁾は1916年21才のとき商務印書館編訳所で働き始め、1919年『学生雑誌』において、また同年末から『小説月報』等において初期の文芸評論活動を始める⁽²⁾。茅盾は1920年から『小説月報』の 小説新潮 欄の編集を任せられ、1921年より『小説月報』の主編を担当して、同誌の全面改革を行う。また1921年1月文学研究会が正式に発足し、その主要な文芸理論家として活躍した。1923年『小説月報』の主編を降りる。茅盾はその後にも文芸活動を継続すると同時に、社会活動に積極的に関わり、国民革命に参加する。

茅盾は1920年代始めの文学活動において、新ロマン主義および自然主義をどのように主張したのか。また20年代中頃どのようにマルクス主義文芸理論に基づいた見解を述べ、そして国民革命の挫折後、1928年いかに革命文学論争に参加したのだろうか。

小論は、茅盾におけるこれらの文芸思想に関する諸課題自体の内的構造、また諸課題間の関連をたどり、できるだけ彼の文学観の深化・発展の特色が浮き彫りになるように心がけて、素描を試みようとするものである⁽³⁾。

以上のような諸問題等について検証することを、小論の目的とする。

ただ、行論が長くなるため、諸課題の内的構造とその関連について、あらかじめ若干の見通しを述べることにする。私は1925年頃までの沈雁冰の文芸論の推移を次のように理解する。

第一に、その文学論の中心軸には人生のための文学(人生を反映する、人生のための文学)が存在した⁽⁴⁾。

第二に、自然主義と新ロマン主義の文学思潮(創作方法)⁶⁾は二つの波動のように、この中心軸上を起伏消長して、深化しつつ移行した。

第三に、交互に表層に現れる二つの文学思潮(創作方法)の波動を推進する要因となったものは、中国文学界、中国社会に対する茅盾の現実認識と、それに基づく具体的方策の考察である。それらの認識と方策の考察自体も深化しつつ、二つの波動を規定した。

第四に、人生のための文学という中心軸は、旧社会旧文化の変革を目指す人生のための文学という性格をもっていた。この中心軸は1923年末頃国民革命への発展の機運という動力を受け、国民革命を支持する人生のための文学という方向に進展しつつ、その後1925年頃マルクス主義文芸理論を受容することを通じて、被抑圧民族・被抑圧階級の人生のための文学、という新たな中心軸に「止揚」された。

以上のような見通しが成立しうるのかどうかも含めて、上記の諸問題を追求していくことにする。

、自然主義の提唱へ

1919年末から1922年にかけて、この間の文学に関する茅盾の主張には、二つの波動の振幅が少しずつ明瞭となっていく変化・発展の経過を見ることができる。1919年末「小説新潮 欄預告」(『小説月報』第10巻12号⁶⁾、1919・12・25)から始まり、1922年「自然主義与中国現代小説」(『小説月報』第13巻7号、1922・7・10)における確固とした自然主義の主張へと至る軌跡の概略を、この章で跡づける。

一、自然主義の言及から新ロマン主義の提唱へ

まず1919年末から20年頃にかけての茅盾の文学主張を見ることにする。茅盾は西洋文学を翻訳紹介する場合、何を基準とすべきかを論ずる。

茅盾は第一に、文学進化の歴史という観点から、すなわち西洋の文学思潮の発展史を基準として、文学をとらえようとする。

「西洋の小説はすでにロマン主義(Romanticism)から進んで写実主義(Realism)、象徴主義(Symbolicism)、新ロマン主義(New Romanticism)となっている。我が国はなお写実以前に止まっており、このことはまた明らかに人の後塵を拝することでもある。(『小説新潮 欄宣言』、『小説月報』第11巻1号、1920・1・25)⁷⁾

こうした西洋の文学思潮進化の歴史から見れば、当時の中国の文学は写実以前の「古典」と「ロマン」の間をさまよっており、その進化の順序からしても、また中国人が「神秘」、「象徴」、「唯美」を理解できないことから、「写実派自然派の文学を先行して紹

介すべき」（「我对于介绍西洋文学的意见」、『時事新報 学灯』、1920・1・1、底本は『茅盾全集』第18巻、人民文学出版社、1989）だとする。

第二に、新文学の研究者は芸術的技法に注意を払わなくてはならない、そのため先ず写実主義、自然主義を紹介すべきであるとする。

「思想は一日千里と猛進することができる。しかし芸術（ここでは芸術的技法の意 中井注）は恐らく『本源を探求する』のでなくては、不可能である。なぜなら芸術は古い手本に基づいて美化されるものだからである。古い手本を探りあてて順次行うのではなく、軽率に『唯だ新に是れならう』のであれば、立ち行かない。そのため中国では現在新派小説を紹介しようとするならば、まず写実派、自然派から紹介し始めるべきである。」（「小説新潮 欄宣言」、前掲、1920・1）

第三に、「問題研究の文学」の翻訳における、「現在の社会の対症薬」（「我对于介绍西洋文学的意见」、前掲）、「新思想宣伝の急先鋒」（同上）としての側面にも注意を向けている。

上のように、茅盾は先ず写実派自然派の文学から紹介すべきことを言う。

しかし1920年2月に茅盾は、「ここ1年余り写実主義を提唱し、社会の劣悪な根源を徹底して暴露した」（「我們現在可以提倡表象主義的文学麼？」、『小説月報』第11巻2号、1920・2・25）しかしほとんど反響がなかったとする。茅盾は1919年に、チェーホフの「在家里」（『時事新報 学灯』、1919・8、邦訳「家で」）、「売詐諷的」（『時事新報 学灯』、1919・10、邦訳「中傷」）、「方卡」（『時事新報 学灯』、1919・12、邦訳「ワーニカ」）、「モーパッサンの「一段弦綫」（『時事新報 学灯』、1919・10、邦訳「紐」）、「ゴーリキーの「他的情人」（『時事新報 学灯』、1919・10、邦訳「意中の人」）等を翻訳している⁽⁸⁾。「ここ1年余り写実主義を提唱」して反響がなかったとは、このような活動の結果を指していると思われる。現在の中国社会の人心の感溺は一種類の薬、写実主義のみで治すことはできない。「同時に数本の道を行くべきであり、それゆえ象徴を提唱すべきこととなる」（「我們現在可以提倡表象主義的文学麼？」、前掲、1920・2）とする。また次のように写実主義文学の欠点を指摘する。

「写実主義の文学の欠点は、人を落ちこませ、失望させ、しかも人の感情を痛く刺激して、精神的に全く中和するものがないことにある。私たちが象徴主義を提唱するのは、その調整を得たいと思うからである。さらに、新口マン派の勢いは日増しに盛んとなり、彼らは正しい道を指し示して、人を失望させない力がある。私たちはこの道を行かなばならない。しかしこの道を歩こうとするには準備がなければならないし、そして準備すべき時になっている。象徴主義は写実の後を引き継ぎ、新口マンに至る一つの過程である。だから先ず提唱せざるを得ない。」（「我們現在可以提倡表象主義的文学麼？」、前掲、1920・2）

茅盾は、先の「我对于介绍西洋文学的意见」(前掲、1920・1)と同じように文学思潮進化の歴史の観点に立ち、さらに同じように中国社会・文学界と中国人の現状(この場合、人心の惑溺)から考えるという観点に立つ。しかしここでは写実主義のマイナス面に注目する⁹⁾。そのマイナスを中和し、また理想としての新ロマン派へ至る過程として、象徴主義をも受け入れることを主張する。さらに、次のように自然派文学の欠点を指摘する¹⁰⁾。

「文学上の自然主義は19世紀末の20年間に隆盛し、まさしく科学的唯物論と同時に進んだ。それはロマン(romantic)文学の末流^マに対する反動であり、文学思潮進化史の中で、もちろんかなりな貢献をした。しかしそれによっては決して最高水準の文学を創造することができない。観察(observation)と想像(imagination)は文学の二大原則である。自然派文学は観察を重んずるのみである。だがもともと当時においてはロマン文学が想像だけを重視する偏りを補うことができた。しかし文学全体から見れば、過ぎたるは及ばざるが如しである。分析(analytic)と総合(synthetic)は人生を表現する二つの異なった方法である。現社会・現人生がどのように欠点の多いものであるにしる、総合してみれば、結局罪悪の下に伏在する真善美が存在する。自然派は分析的方法だけで人生を観察し人生を表現することにより、見るものすべて罪悪という結果となり、そのため人々を失望させ、悲嘆させる。それはまさしくロマン文学の空想空虚が人々を失望させたのと同じように、ともに健全な人生観を導くことができない。それゆえロマン文学にはもとより欠点があるが、自然文学の欠点はさらに大きい。」(「為新文学研究者進一解」、『改造』第3巻1号、1920・9・15、『茅盾全集』第18巻)¹¹⁾

冷酷な客観主義から冷静で熱烈な主観主義へと解放されたのは、文学の一步前進である。新ロマン主義が総合的に人生を表現しようとする試みは、すでに小説の分野で大きな光明を放っている。このように茅盾が指摘し、新ロマン主義の作家・作品として挙げるのは、ロマン・ロラン(1866 - 1944)であり、『ジャン・クリストフ』である。茅盾は、『『欧美新文学最近之趨勢』書后』(『東方雜誌』第17巻18号、1920・9・25、『茅盾全集』第18巻)で次のように言う。

「写実主義文学は論難することはできるが、しかし解決することはできない。現社会の内幕を暴露することはできるが、しかし未来社会の光明を導き入れることができない。ゆえにその結果、人を憤懣に陥れてどのようにすべきか分からなくさせ、人々はついには落胆し否定的となり、或いは危険な思想(主義)に赴く。」(『『欧美新文学最近之趨勢』書后』、前掲、1920・9)

「ロマン主義は古典主義に対する純然たる反動である。しかし新ロマン主義は写実主義に対して反動ではない、そうではなくて進化であると思う¹²⁾。(中略)新ロマン主義は、写実主義における肉体面の強調と精神面の弱化的欠点を補い、写実主義が全般的に批判す

るのみで指導しないことを補正する。また写実主義が悪中の善を見ようとしないのでを救済するもので、当世の哲学における人格的観念論の傾向とまさに呼応する。新ロマン主義の最も代表的作品としうるものは、フランスのロマン・ロランの『Jean Christophe』を推す。」（同上）

「この本の英雄は極めて真理を好む人である。環境の如何にかかわらず、自分自身や自らの生命にかかわらず、理解しようとするのはただ真理だけである。（中略）ここで言う真理とは普遍的真理であり、書中のジャン・クリストフ（Jean Christophe）の精神の冒険とはすべての人類における精神の冒険であって、過去の専制から脱却し、将来に貢献しようとするものである。」（「為新文学研究者進一解」、前掲、1920・9）

それゆえに、茅盾は次のように言う。

「〔中国の〕新思潮を助けることのできる文学は当然新ロマンの文学であるはずだ。私たちが真実の人生観に導く文学は新ロマンの文学であって、自然主義の文学ではない。ゆえに今後の新文学運動は新ロマン主義の文学でなければならない。」（同上）

上に見るように、1919年20年茅盾の主張は写実派自然派の文学の紹介に対する賛同の言及から転じて¹³、新ロマン主義の主張へと至っている¹⁴。

また、茅盾は新文学の本質について次のように言う。

「新文学とは進化した文学である。進化した文学には三つの要素があると考え。第一に普遍的性質である。第二に人生を表現し、人生を指導する力がある。第三に平民のためであって、ある種の特殊な階級の人のためではない。まさに普遍性を持つとすることがために、私たちは口語体で作ろうとする。まさしく人生を表現し、人生を指導することを重視するがゆえに、思想を重視し、型を重んじない。まさに平民のためであるがゆえに、人道主義の精神と光明活潑な姿を持つとすること。」（「新旧文学平議之評議」、『小説月報』第11巻1号、1920・1・25）

この間（1919年末から1920年頃）の茅盾の思考は次のようにまとめることができると思われる。

中国のあるべき新文学の姿として、基本的には人道主義的精神に基づいた、人生の表現としての、人生のための文学を主張する。

中国の文学の現状に基づき、西洋文学の翻訳紹介においては、先ず写実主義自然主義の紹介翻訳が必要であるとした。しかし自然主義の作品翻訳に反響がなかったという現状もあり、また中国の人心の惑溺が自然主義等のみで治すことができないと考え、自然主義より転じる。そして西洋の文学思潮進化史を参照しつつ、自然主義のマイナスの側面を明らかにして、自然主義が進化した思潮としての、その欠点を克服する新ロマン主義の提唱の有効性を説くものである¹⁵。同時に、

茅盾のこの間の思考には、中国の社会状況、文学状況にとって、中国人にとって、或

る文学思潮（創作方法）がどのような有効性を持つかを考えるという基本姿勢の萌芽がみられる¹⁶⁾。ここで萌芽と言うのは、この間の思考には、中国・中国人の現状、中国の文学界の現状がどのようなものであるのかという分析と認識が具体的に十分には追求されていない、そうした現状認識に基づいた或る文学思潮の有効性に対する判断ではないことによる。むしろこの間に示されている文学思潮をめぐる考察は、西洋の文学思潮進化史を主たる判断の根拠とし、中国社会の反応をも一部考慮にいれながら、中国の現状における或る文学思潮（創作方法）の有効性とその可能性を判断するものであった、と思われる¹⁷⁾。

二、自然主義の提唱へ

茅盾によれば、旧来中国において文学は、「文は以て道を載す」ものとされ、聖賢のために道を説き、勸善懲悪を述べ、支配者を称えた。また他方では、文学者は文学を暇つぶしのものとした¹⁸⁾。茅盾は、文学が「楽しいときの遊び、或いは失意のときの暇つぶしではなく」（「文学和人的關係及中国古来对于文学者身分的誤認」、『小説月報』第12巻1号、1921・1・10）、文学の目的は、「人生を表現することにある」（同上）とし¹⁹⁾、文学は全人類の喜びと同情を広げるもので、時代の特色をその背景とするものとした。文学は、人々に対して近代社会における全人類の一員としての自覚を求めるための、道具であった。このような文学であれば、「ロマンでも良い、写実でも良い、象徴神秘でも良い」（同上）ので、それが人の文学、真の文学であった²⁰⁾。しかし中国の当時の現状を考えれば、問題はさらに具体的となる。1921年において、中国文学界の現状認識に基づいて思考する態度が鮮明になるにともない、新ロマン主義的傾向は徐々に後景に退いていき、自然主義の必要性が再び強調されるようになる。

1、西洋文学をどのように中国に紹介するのかについて

茅盾宛て周作人の来信「翻訳文学書の討論」（1920年12月27日付け、『小説月報』第12巻2号、1921・2・10）は、西洋文学をどのように中国に紹介するのかという問題について提言する。周作人は、中国の特別な事情（中国人が盲従しやすく、非常に古を好み、客観的になれないこと）を指摘し、また翻訳する人手が不足している現状を挙げて、西洋古典文学（『神曲』等）は後回しにし、未だに不十分な近代の文学をまず翻訳すべきとした。今最もすべき仕事を置いて、古典文学を訳そうとするのは、中国文学界に対する大きな損失となるとした。これは理想の高唱に対する警戒と、現実に基づいた方策の重要性を指摘するものであった²¹⁾。

周作人の、こうした中国の現状認識に基づいた提言を受け、茅盾は「翻訳文学書の討

論 復周作人」（『小説月報』第12巻2号、1921・2・10）において、以前の西洋文学に対する「系統的」（「对于系統的經濟的介紹西洋文学底意見」、『時事新報 学灯』、1920・2・4、『茅盾全集』第18巻）紹介が必要であるとする自らの意見を撤回する²²。さらに一步進めて茅盾は、アルツィバーシェフの『サーニン』の翻訳について、もしも『サーニン』の肉欲的唯我主義が中国で高唱されるならば、これまで社会や人類の存在を知る事のなかった中国社会においては、思いもよらぬ巨大な反動を生みだしかねないと言う。またアンドレーエフの作品について、自分は傾倒しているけれども、『The Black Masks』等は現在煩悶し志の定まらない青年が読めば、大きな危険（一切の否定）を生み出すと言う²³。言い換えれば茅盾はここで、中国に紹介すべき西洋近代の作品を選択する場合、単に個人的好みによるのではなく、単に文学上の思潮の区分によるのではなく、また系統的に翻訳紹介することが良いという理論上の理想論に従うのでもない。茅盾は中国社会の現状に基づいて、翻訳の必要性の緩急の面から、また作品のもたらす作用の面から、考察しようとしている。ここに、現実分析・認識に基づいて対応する批評家としての茅盾の姿勢が鮮明に現れてきている、と言える²⁴。

2、国内創作界の現状分析

中国の文学界の現状、特に新文学の小説の現状について、茅盾の調査とその報告が、「春季創作壇慢評」（『小説月報』第12巻4号、1921・4・10）と「評四、五、六月的創作」（『小説月報』第12巻8号、1921・8・10）に発表された。前者では、「国内の創作界はほとんど極限的にまで寂しいものである。毎月各新聞雑誌に発表される創作文学は本来数が多いし、良いものは一層少ない。（中略）現在真の批評家がいなくても、批評する材料すらもない。」とする。茅盾は短篇小説87篇、戯曲8篇、長篇小説2篇を読み、その中で、西洋小説を模倣して人物名を中国名に変えただけのもの等、創作の資格のないものは取りあげないとする。表現手段または思想が未熟であるが一読の価値のあるものとして書名のみを挙げたものが24篇、比較的良好な作品とし若干論評を加えたものが20篇であった。後者の「評四、五、六月的創作」では、4月から6月の三ヶ月間に発表された小説120余篇、戯曲8篇を、その題材に基づいて表に分類する。その中で、男女の恋愛を描写したものは70篇以上あり、都市労働者の生活を描いたものは3篇にすぎない。茅盾は、男女の恋愛を取りあげること自体は、人生を忠実に表現する文学であるかぎり、価値があり、必要だとしながら、実際にはそれらの作品がほとんど決まりきった型と、単一の個性の登場人物しか持たない作品であり、模倣の偽の作品である、と断ずる。また一方で茅盾は、魯迅の「風波」（『新青年』第8巻1号²⁵、1920・9・1）と「故郷」（『新青年』第9巻1号、1921・5・1）を高く評価している。そして最後の部分に次のように言う。

「現在の創作界に対する私の要望は 民衆の中へ である。民衆の中へ行って経験し、まず中国の自然主義文学を作りだすことである。さもなければ、現在の 新文学 の創作は 旧い道 へ戻っていくことであろう。」(「評四、五、六月的創作」)

作家が民衆の中で体験を積み、その経験と現状認識に基づいて、中国の現実・人生を反映する自然主義文学を作りだすことが急務だとする⁶⁶。そうでなければ、西洋文学を表面的に模倣した偽の作品が作られるばかりであり、旧文学の道へと回帰するほかはないとする⁶⁷。

茅盾は現実の中国の小説・戯曲を調査分析して、その結果に基づき創作界の進路を模索し、再び自然主義に言及して、自然主義を「一年以上提唱し研究する必要」(周作人宛て書簡、1921・8・3、前掲)があると言う。中国創作界の現実がどのようなものか、またその現実が必要とするものは何かを明らかにし、その現実認識に茅盾は基づこうとする。ここに茅盾の、以前(1920年頃)とは異なる明確な立論の姿勢を見ることができるとする。すなわちここでの自然主義への言及は、西洋の文学思潮進化史に主たる拠り所を求め、「本源を探求」してなされたものではなかった⁶⁸。またここには旧文学に対する鋭い警戒感がある。

3、自然主義の必要性

茅盾は中国の新文学の発展を阻害する二つの要因を次のように指摘する。

「現在最も流行している言葉は、『或る主義にこだわるべきではない』というものである。今、自然主義写実主義を主張することは、一層非難を受ける。(中略)しかしこの見かけの堂々たる流行病の高唱は、実際のところ新文学の発展に利益はなく、しかも有害である。中国には元来文学作品のみあって、文学批評がなかった。文学の定義、文学の技術は、中国においては系統的説明がなかった。(中略)これまで詩歌小説を蔑視して、悦楽と暇つぶしの道具と見なした。またこれまでの描写方法は忠実さを尊ばず、単に行文の便宜を図るだけであった。暇つぶしの文学観、忠実でない描写方法が、文学進化の道における二大障害物である。」(「文学作品有主義与無主義的討論」、『小説月報』第13巻2号、1922・2・10)

茅盾は、従来の、暇つぶしの文学観と、忠実でない描写方法が、新文学の発展を阻害する二大障害要因であるとする。ゆえに一方では先に見たように、人生のための文学観を説き、他方で忠実でない描写方法をいかに克服するかを指摘する。

「数年前中国人は言情小説〔愛情小説 中井注〕を作り、いつも『此れ実事なり』という一句を付け加えることを好んだ。実際には全篇真実を感じさせるところはどこにもなかった。これは描写方法が真実を追究していないためである。自然主義は世界の文壇においては、過ぎ去ったかのようなのである。しかしこれまで落伍してきた我が中国文学が

もしも前進しようとするならば、自然主義というこの一時期は飛び越えていくことができない。まして描写に忠実さを求めないのが、中国文人の通弊である。」（同上）

現在中国の小説の描写方法が、想像のみに頼り実地の観察をしない、すなわち真実の追求をしようとしないうる状況を踏まえて、客観的描写の必要性、自然主義の描写方法の中国における必要性を指摘する。中国の新文学が一度自然主義の洗礼を受ける必要性を説く。また茅盾は、次のように言う。暇つぶしの文学観と真実を追求しない描写方法という、「二つの欠点を矯正しようとするなら、自然主義文学の輸入は対症薬となるだろう。（中略）自然主義文学にはどれだけの欠点があるとしても、ただ中国人の二つの大病を矯正することについて言えば、実際利益は大きく、害は小さい。」（「一年来的感想与明年的計劃」、『小説月報』第12巻12号、1921・12・10）

茅盾は、中国の新文学の対症薬として、人生を直視して、客観的描写により真実を追求する自然主義文学を受容する必要性を説いた。それは、中国における自然主義の作用の、プラス面とマイナス面を秤量したうえでの主張である²⁸。

三、「自然主義与中国現代小説」

「自然主義与中国現代小説」（『小説月報』第13巻7号、1922・7・10）は自然主義文学をなぜ今主張するのかを詳細に体系的に論ずる。茅盾は現代の小説を、内容（思想）と形式（構造、描写方法、題材）の面から新旧の両派に分ける。そのうち旧派小説を三種類に分ける、すなわち、旧式章回体の長篇小説（たいていは白話である）、章回に分けない旧式小説＝甲系と、中国西洋混合の旧式小説＝乙系（甲系乙系どちらも文言・白話のものがある）、短篇小説（文言・白話どちらもある）である。茅盾は、中国現代におけるこの旧派小説三種類の誤りを、技術上の二点、思想上の一点において指摘する。技術上の誤りの二点は次のようなものである。

「（一）彼らは小説が描写を重視するものであることさえ知らない。記帳式の叙述法で小説を作り、おびただしい紙幅に掲載するものは動作の明細書にほかならない。現代的感覚の鋭い人に見せれば、蠟をかむような味がするだけである。

（二）彼らは客観的観察を知らず、ただ壁の前で主観的に虚構を作りあげているだけである。『此れ実事なり』と名づけた作品には、至るところ虚偽とわざとらしさの気配があって、実事が読者の心眼に再現できないこととなる。」（「自然主義与中国現代小説」、前掲、1922・7）

また思想上の誤り一点について、

「思想上の最大の誤りは、遊びの、暇つぶしの、金銭主義の文学観である。」（同上）とする。

新文学の小説が旧派の小説と違うのは、思想面において、新派は文学が人生を表現するもの、人と人との感情を疎通させ、人々の同情を広げるものと考えるところにある⁹³。しかし、技術面から言えば、新文学の作家（大半は青年）も良く知らない対象を無理にも描写しようとし、対象（第四階級、「損なわれ侮辱された者」）の心理にも疎い。さらに性急に文学を、或る思想の宣伝の道具と考える。

このように分析した後で矛盾は、旧派小説と新小説に共通する技術上の弱点二点を指摘する。第一に描写方法において客観的態度に欠けること、第二に題材の採用において内在的な目的に欠けることである。このような弱点を補うことができるものが自然主義だとする。

自然主義者は真を目的とする。自然主義者によれば、宇宙は一つの原則の支配を受け、しかし宇宙には絶対に等しい二つのものは存在しない。そのため何事にも実地の観察を重視し、その観察したものをありのまま客観的に描写する。この描写方法は、旧派小説の「記帳式」記述を、新小説が描写対象をよく知らずに書く欠陥を、对症下药として矯正することができる。

また自然主義は近代科学の洗礼を受けたものであり、その描写方法、題材、思想は、すべて近代科学と関係がある。自然主義者が、科学で発見された原理を小説に応用したことを学ばなければならない。社会小説を書く者が社会問題を研究したことがなく、たんに「直覚」によるのであれば、その目的の浅薄さが現れるのは避けられない。ゆえに自然主義者の態度を学んで、題材について十分に調査研究することの必要性を指摘する。

このように論じたうえで、自然主義に対する様々な反論を想定して、矛盾は逐一答える。文学上の描写は、観察と想像の両者による相互補完的のものである。また、文学の作用は、一面で社会人生の表現であり、他面で個人の生命力の表現でもある。いま自然派の主張は後者の部分（描写における想像と、作用における個人の生命力の表現）を否定するものである。これに対し、矛盾は理論として上の主張を認めつつ、しかし実際の新旧文学の問題を論ずる場合、中国の現状の弱点を補うことができるのは何によるのかということが重要である。その目的のためには自然主義を提唱する、とする。自然派の物質的機械的運命論は不健全である。これに対し矛盾は、自然派の作品に含まれる思想と、その技術を混同することはできない。自然主義から学ぼうとするものは、客観的描写と実地の観察という技術的方法であるとする。新文学はいま萌芽期にあり、何らかの主義で束縛すべきではなく、天才の自由な創造に任せるべきだ。これに対し矛盾は、いま新文学は混乱期にあり、多くの作者は盲動している。自由な創造は実際には自由盲動に過ぎない。ある一つの文芸思潮によって混乱期を抜け、その後多様な発展を期すべきである。従来中国には真情の流露する作品は少なく、文人には真摯な情感に欠けていた。いま情緒を主とするロマン主義を主張すべきである。これに対し矛盾は、中国現

代の小説の欠陥（暇つぶしの文学観と忠実でない描写）を旧口マン主義は治療し救済することができないとする。

中国社会、中国文学界の現状認識に基づく⁶¹、このような「自然主義与中国現代小説」（前掲、1922・7・10発表）の理路整然とした内容を読むと、これが茅盾における自然主義提唱の総括的文章であったことが理解できる⁶²。そして他方で、新口マン主義に対する評価について言えば、直接にはここで言及していない。言い換えればここで新口マン主義を茅盾は積極的に否定したのではない。しかし、当時の中国文学界の現状における、また当時の時点における、対症薬としての有効性、緩急の必要性の観点から、自然主義の提唱がここに主流となり、新口マン主義は底層流として後景に退き、そして茅盾の内面に沈潜したと思われる⁶³。

注

- 1：行論の関係上、小論では字「沈雁冰」を使わず、筆名「茅盾」を使用する。
- 2：「商務印書館編訳所」（『我走過的道路』上冊、生活・読書・新知三聯書店、1981・8）『茅盾年譜』（査国華、長江文芸出版社、1985・3）によれば、茅盾は1917年頃から「学生与社会」（『学生雜誌』第4巻12号、1917）また「托尔斯泰与今日之俄羅斯」（『学生雜誌』第6巻4号・6号、1919）等の文章を発表している。ただ、系統的な文芸評論は「小説新潮 欄預告」（『小説月報』第10巻12号、1919・12・25）から本格的に始まると思われる。
- 3：これらの課題の考察にあたって、次の論文に目を通した。それぞれたくさんのご意見を学ばせていただいた。適宜、本文或いは以下の注において言及することとする。（先行研究についての不十分な点は今後補っていくことにする。識者のご教示をお願い致します。）

〔日本〕

- （1）「茅盾の自然主義受容と文学研究会」（是永駿、『野草』第6号、1972・1・20）
- （2）「茅盾の自然主義受容についての一考察」（南雲智、『桜美林大学中国文学論叢』第4号、1973・10・1）
- （3）「茅盾初期文芸思想の形成と発展（1） - （5）」（青野繁治、『野草』第30号、1982・8・10、同第32号、1983・12・1、同34号、1984・9・1、同第36号、1985・10・31、同37号、1986・3・20）
- （4）「日本における茅盾研究 その新たな展開」（是永駿、『野草』第37号、1986・3・20）
- （5）「初期茅盾における原理的文学観獲得の契機 そのロシア文学受容」（芦田肇、『東洋文化研究所紀要』第101冊、1986・11・25）
- （6）「初期茅盾の文学観 文学研究会と写実主義」（佐治俊彦、『中国の文学論』、汲古書院、1987・9）
- （7）「鄭振鐸の『血と涙の文学』提唱と費覺天の『革命的文学』論 五四退潮期の文学状況（二）」（尾崎文昭、『明治大学教養論集』第217号、1989・3・1）
- （8）「茅盾『論無産階級芸術』の典拠について」1 - 4（白水紀子、『中国文芸研究会報』第92、93、94、96号、1989・6・30、7・31、8・31、10・31、原載『茅盾研究会会報』第7期、1988・6）

- (9) 『論無産階級芸術』について(白水紀子、『野草』第43号、1989・3・1)
〔中国〕
- (1) 『論茅盾の生活と創作』(孫中田、百花文芸出版社、1980・5、第1章)
- (2) 『茅盾の創作歷程』(莊鐘慶、人民文学出版社、1982・7、第2章)
- (3) 『茅盾早期思想研究(1917-1926)』(楽黛雲、『中国現代文学研究叢刊』1979年第1輯、北京出版社、1979・10、底本は『中国当代文学研究資料茅盾專集』第2卷上冊、福建人民出版社、1985・7)
- (4) 『關於茅盾与自然主義的問題』(黄繼持、『抖擻』第50期、1982・7、底本は『中国当代文学研究資料茅盾專集』第2卷上冊、福建人民出版社、1985・7)
- (5) 『論茅盾早期 為人生 的文学觀』(楊健民、『廈門大學學報』1982年第3期、底本は『中国当代文学研究資料茅盾專集』第2卷上冊、福建人民出版社、1985・7)
- (6) 『茅盾 五四 時期的進化論思想及其文藝觀』(丁柏銓、『南京大學學報』1983年第3期、底本は『中国当代文学研究資料茅盾專集』第2卷上冊、福建人民出版社、1985・7)
- (7) 『茅盾与自然主義』(呂効平、武鎮寧、『中国現代文学研究叢刊』1983年第2輯、底本は『中国当代文学研究資料茅盾專集』第2卷上冊、福建人民出版社、1985・7)
- (8) 『茅盾前期文学思想散論』(朱德發等、山東人民出版社、1983・8、『茅盾 五四 時期的新文学觀』)
- (9) 『茅盾和新浪漫主義』(孫慎之、『茅盾研究論文選集』上冊、湖南人民出版社、1983・11)
- (10) 『論茅盾早期提倡新浪漫主義与介紹自然主義』(黎舟、『茅盾研究』第1輯、文化藝術出版社、1984・6)
- (11) 『論茅盾 五四 時期文藝思想特色』(張中良、『茅盾研究』第2輯、文化藝術出版社、1984・12)
- (12) 『早期介紹写實主義、自然主義問題』(楊健民、『論茅盾的早期文学思想』、湖南文芸出版社、1987・7)
- (13) 『沈雁冰在 五四 時期的理論功績』(劉納、『茅盾研究』第3輯、文化藝術出版社、1988・7)
- (14) 『茅盾早期文学批評兩面觀』(丁柏銓、『茅盾研究』第5輯、文化藝術出版社、1991・3)
- (15) 『轉折時期的文学思想 茅盾早期文藝思想研究』(楊揚、華東師範大學出版社、1996・10、導論、第1章)
- 〔その他〕
- (1) 『茅盾為現實主義和馬列主義文藝理論所作的鬭爭』(馬・嘎利克 マリアン・ガーリック 著、張曉雲等訳、底本は『中国当代文学研究資料茅盾專集』第2卷下冊、福建人民出版社、1985・7)
- なお、小論の中で詳しく注をつけたのは、私自身の心覚えのためでもある。
- また印刷の都合上、引用上の繁体字および中国の簡体字は、代用できる限りにおいて日本の新字体に改めてある。
- 4: 『茅盾 五四 時期的新文学觀』(朱德發等、『茅盾前期文学思想散論』、山東人民出版社、1983・8)は、
- 「新文学が人生を表現し、人生を反映するものであることを強調するのは、五四時期の人生のための文学派の共通の認識であった」とする。
- 「初期茅盾における原理的文学觀獲得の契機 そのロシア文学受容」(芦田肇、前掲、

1986）は、茅盾の文学活動に一貫して、「文学は人生を反映（表現）しなければならない」という文学認識が軸にあり、価値評価の基準として存在した、と指摘する。

- 5：『茅盾早期文学批評両面観』（丁柏銓、前掲、1991・3）は、「茅盾の言及する 写実主義 は往々、西洋文学発展史上の文学運動或いは文学潮流、そして芸術的に世界を把握する過程の中で採用される創作方法という、この二つの異なった含意がある。」と指摘する。

私は、この意見に賛成し、同時に新ロマン主義についても同様であると考える。

- 6：『茅盾全集』第18巻（人民文学出版社、1989）の脚注では、「第14巻第12号」とするが、ミスプリントである。

- 7：茅盾はまた、「我对于介绍西洋文学的意见」（『時事新報 学灯』、1920・1・1、『茅盾全集』第18巻、人民文学出版社、1989）で西洋文学思潮の進化について次のように言う。

「西洋古典主義の文学はルソーにいたって始めて打ち破られ、ロマン主義はイブセンにいたって終わりを告げ、自然主義はゾラから起こり、象徴主義はメーテルリンクから始まって、現在の新ロマン派にいたる。始めは前人の範囲のなかに拘束されるが、後に解放される。（ルソーは文学解放の時代である。）主観を重視する描写は、主観から客観に変化し、また客観から主観へ変化し戻る。しかしすでにそれは以前の主観ではない。その間の進化の順番は一步で到達できるものではない。」

- 8：『茅盾年譜』（査国華、長江文芸出版社、1985・3）「初期茅盾における原理的文学観獲得の契機 そのロシア文学受容」（芦田肇、前掲、1986）による。「他的情人」は、「俄国近代文学雑譚下」（『小説月報』第11巻2号、1920・2）の呼び方に基づく。前記論文「初期茅盾における原理的文学観獲得の契機」（芦田肇）は、次の点を詳細緻密に指摘する。すなわち、1920年1月頃、「文学は人生を反映（表現）しなければならない」と初めて表明された茅盾の文学観は、1919年のロシア近代文学の翻訳を通じて、またロシア近代文学に関する Thomas Seltzer の見解によりつつ形成されたもの、とする。

また、「方卡」について茅盾は、「俄国近代文学雑譚下」（前掲、1920・2）で次のように紹介する。

「試みに彼〔チェーホフ〕の短編『方卡』“Vanka”を見てみると、わずか数百語によって、貧しいみなし子が靴屋の主人の虐待を受ける苦しみ、将来の一生の事柄、社会の人々の孤児の身の上への無関心、酒びたりの祖父のだらしなさ、これらを一一つ形容し表現する。この短篇から少くとも次のことが発見できる。(1)徒弟制度の非道、(2)孤児院の普及の切実な必要性、(3)貧しいみなし子は社会において生活の落伍者であり、その前途は悲観すべきものであること、(4)こうした人は将来盗賊となるかもしれないこと、(5)こうした人も本来、立派な家のお坊ちゃんお嬢ちゃんと同じように良い子であること。このような問題はこれまで社会学等が議論してやまないことである。しかしチェーホフはたった数百語で描写している。なんとすばらしい手段であろうか。」

このような茅盾の言及を読むと、「方卡」が非常に明白な意図のもとに翻訳されたことを推察できる。

- 9：茅盾はそのほか、「芸術的人生観」（『学生雑誌』第7巻8号、1920・8・5、『茅盾全集』第18巻）で次のように「過度な写実」の欠点について言う。

「実際過度なロマンは、もとより芸術上許されない、しかし過度な写実も『及ばざる』に失ってしまう。というのも芸術作品は全く理想を持たず、構想がないわけにはいかないからであ

る。」

- 10：写実主義と自然主義について、矛盾は「自然主義的懐疑と解答 復呂芾南」(『小説月報』第13巻6号、1922・6・10)で、Saintshung や Prof. W. A. Neilson の説を参照して、両者は本質的には変わらない、描写方法の客観化の多少にある、とする。バルザック、フロベールを写実主義とし、ゾラを自然主義とする。「關於矛盾と自然主義的問題」(黄継持、前掲、1982・7)の指摘するように、矛盾は「自然主義」について、ゾラをも含めた広義の写実主義として言及する場合が多かったと思われる。
- 11：この文章(「為新文学研究者進一解」)の中で、矛盾はさらに次のように言う。
「社会の暗黒がとくにひどく、思想の閉鎖性がとくにはなはだしく、また一般の青年が新思想の意味をまだ徹底しては理解していない中国において、自然主義を提唱し、自然主義を流行させるならば、その害悪はさらにひどいものとなる。私は敢えて、そのもたらされる害は消沈する精神とエゴイズムの蔓延であると推測する。」
- 12：矛盾は「霍普徳曼伝」(『小説月報』第13巻6号、1922・6・10)で次のように言う。
「いわゆる新口マン運動は、表面的には自然主義の反動のようであるが、実際はむしろ自然主義の助手である。新口マン作家の努力によって、自然主義の文学上の価値は一層高くなった。多くの新口マンの作品は自然主義の技術を根底としている。『沈鐘』もまさしくこの例の中の一つである。」
- 13：矛盾は「自然主義的論戦 復周贊襄」(『小説月報』第13巻5号、1922・5・10)で次のように言う。
「来信には言う。『自然主義者は世の中の悲哀を描くが、世の中のために悲哀を解決しないであろう……』、そしてその次の一段落は、この意味であると思われる。これもかつて人が自然主義に反対した一つの理由である。私もかつて一時これがために自然主義文学に反対した。」
また「自然主義的懐疑と解答 復周志伊」(『小説月報』第13巻6号、1922・6・10)で次のように言う。
「自然派文学はたいいてい個人が環境の圧迫を受け抵抗する力もなくて、悲惨な結末となることを描く。これはまことに多くの良くない影響を生みだす可能性がある。自然派が最近西洋で非難を受けるのも、この点にある。私はこのことからかつて懐疑を抱き、ほとんど自信を持つことができませんでした。」
ここで矛盾が一時自然主義に反対した、もしくは懐疑を抱いたとは、1920年2月頃以降のこの時期のことを指すと思われる。
- 14：「矛盾と新浪漫主義」(孫慎之、前掲、1983)は、この頃の新口マン主義の矛盾における存在と内容を明確に指摘する。また1922年以降、新口マン主義の思想が否定されたのではないことも指摘する(この点に関しては、1924年に矛盾は新口マン主義の理想を否定している、と私は考える)。
また、「論矛盾早期提倡新浪漫主義と介紹自然主義」(黎舟、前掲、1984)は次のように言う。
「矛盾は初期に一度、新口マン主義を提唱し、自然主義を紹介した。これは客観的事実である。しかし前者については、新文学建設の終極的目標であり、ただちに実行することができるものであるとは考えなかった。後者については、矛盾は文学進化の観点から出発し、また当時の創作中の良くない傾向に対して提出された便宜上の対策であった。」
黎舟論文は、「新口マン主義の提唱」と「自然主義の紹介」の存在を認めたくうえで、上のよう

に位置づける。

上記の二論文は、しかし、自然主義と新口マン主義がどのような構造をもって、また歴史的に見て、どのような力学的様相をもって茅盾の思想に存在したのかまでは分析していない。私は次のように考える。この二つの文学思潮の提唱が交互に現れる波動の起伏消長は、中国文学界・中国社会の現状に対する茅盾の認識の深化と深く関わって進展しており、二つの文学思潮（創作方法）の内容とその理解もその深化にともない進展している。

- 15：「初期茅盾の文学観」（佐治俊彦、前掲、1987）は、茅盾が「今後の新文学運動は新浪漫主義の文学でなければならない」（1920年9月）という考え方をもちながら、写実派自然派からまず紹介しようとした（1920年1月）とする。こうした茅盾の理解には、「進化論」的歴史認識等を前提として考えなければならないとする。しかし私は、この両者を、時間的に短く近接しているけれども、時期を異にする考え方である、ととらえる。

また、1919年から1922年頃にかけて、茅盾の思想と文芸観について進化論の面から綿密に分析した論文に、「茅盾 五四 時期的進化論思想及其文芸観」（丁柏銓、『南京大学学报』、前掲、1983）がある。

- 16：茅盾は「对于系統的經濟的介紹西洋文学底意見」（『時事新報 学灯』、1920・2・4、『茅盾全集』第18巻）で次のように言う。

「第一にまず紹介についての私の意見を述べる。

西洋の新文学の傑作で中国語に翻訳されたものは、数パーセントにもならない。だから私たちは最も重要で適切なものを選び、先に訳さなければならない。それでこそ時間上労力上の経済的方法である。しかしまた中国にはなお中国語の詳細で分かりやすい西洋文学思潮史がないので、重要適切という以外に、さらに系統的ということに注意しなければならない。（中略）

次に、系統的という以外に、私たちの社会にあうかどうかという問題があり、これも重要であると思う。また例えば『群鬼』は、イブセンの『青年同盟』（“League of Youth”）に換えることができる。というのも中国は現在まさしく老年思想と青年思想の衝突している時代、yung generation と old generation の勝敗を決する時代、だからである。」

茅盾は、「私たちの社会にあうかどうか」という問題を視野に入れて議論しようとしている。

- 17：「商務印書館編訳所」（『我走過的道路』上冊、生活・読書・新知三聯書店、1981・8）で茅盾は1920年頃の自己の文芸観を回顧し、大略次の四点にまとめ紹介する。（1）新文学は新思潮を源泉とし、新思潮は新文学によって宣伝される。我が国の文学は写実主義以前であるが、最終的目標は新口マン主義である。（2）自然主義を紹介すべきであるが、提唱には反対する。自然主義は人を失望させ、苦悶させる。ゆえに中国の新文学は新口マン主義を提唱しなければならない。（3）新文学は進化した文学である。その要素には、普遍的性質を持ち（白話を用いる）、人生を表現し指導する力があり（思想を重視する）、平民のための文学でなければならない（人道主義的精神を持つ）、（4）文学は純粹芸術（芸術のための芸術）ではなく、その本質は人生を表現するものであり、理想をもって表現する。

しかし（2）の内容について、茅盾が「紹介」と「提唱」を明確に分けることができたのは、次の項で言うように、1921年以降のことと思われる。すでに本文で触れたように、1920年2月に茅盾は、「ここ1年余り写実主義を提唱し、社会の劣悪な根源を徹底して暴露した」（「我們現在可以提倡表象主義的文学麼？」、前掲、1920・2）しかしほとんど反響がなかったとしている。

「文学上の古典主義浪漫主義和写実主義」(『学生雑誌』第7巻9号、1920・9、この文献は北京留学中の名古屋大学大学院文学研究科博士課程 後期課程 在学中の内藤忠和氏に御足労を煩わし、北京図書館より複写を入手することができたものです。ここに記して感謝の意を表します)で、茅盾は次のように言う。

「文学ということであれば、その本質は純粋な芸術品ではない以上、当然人生という方面を棄却するのは不都合である。ましてや文学が人生を描写するものであるとすれば、その骨格となる理想がないことはありえない。」

新ロマン主義的方向を支持するこの判断は、西洋の文学思潮進化史に基づいた、茅盾のこの時点(1920・9)の文学的内的的確信という色あいが強く、中国の文学界・社会の現状分析と認識に基づいた方策としての確信という色あいは弱い。

茅盾は、「『小説月報』改革宣言」(『小説月報』第12巻1号、1921・1・10)で次のように言う。

「三、写実主義の文学は、最近すでに衰退終焉の様子が見え、世界観の立場から言えば、多くは紹介すべきではないと思われる。しかし国内の文学界の状況から言えば、写実主義の真の精神とその真の傑作は全くと言ってよいほどない。ゆえに同人は、写実主義には今日においてなお紹介の必要が切実にあると考える。同時に非写実主義の文学もできるだけ多く輸入して、一歩進める準備とする。」

このように1921年の時点で、中国には写実主義の精神と傑作がないと指摘する。写実主義の紹介の必要性を言うこの判断は、1920年と比較して一歩中国の現状の理解に基づいたものと思われる。

18: こうした旧文学に対する茅盾の捉え方は、1923年、25年にも見られる。

「中国の旧来の文学観は(一)文は以て道を載す、(二)遊びの態度、の二種類にほかならない。(中略)両者はちょうど逆の内容で、中国旧来の文学の相対する二極端をなす。」(「什麼是文学 我对于现文壇の感想」、『學術演講録』第2期、1924、松江暑期演講会 1923・8 の講演原稿、『茅盾全集』第18巻)

「それぞれ両極端に走る、禁欲(似せ道学)と肉欲(色情的描写)の二つの思想で表現される中国恋愛文学の中に、健全な恋愛観を探し出すことはできない。」(『打弾弓』、『文学』週報第163期、1925・3・9)

後者では茅盾は、旧来の恋愛文学についても同じ両極端の態度を見て、上のように言う。

19: 「文学研究会宣言」(周作人起草、『小説月報』第12巻1号、1921・1・10)では次のように言う。

「文芸を楽しむときの遊戯、或いは失意のときの暇つぶしと見なす時節は、今すでに過ぎ去った。私たちは、文学は仕事である、しかもまた人生にとって非常に大切な仕事であると信ずる。」

20: 茅盾は、「新文学研究者的責任与努力」(『小説月報』第12巻2号、1921・2)で次のように言う。

「文学を創作するとき不可欠のものは、観察の能力と想像の能力である。両者のうち一つに偏ってはならない。表現の二つの手段は分析と総合である。世の中の万象、人類の生活は、善の一面と悪の一面を必ず持つ。たんに分析的表現法を尊ぶのは、善の一面に偏るのではなく、必ずや悪の一面に偏る。なべてロマン派文学と自然派文学はそれぞれ一方の端を行く。醜悪さの描写にはまことに芸術的価値がある。しかし人生の一方を代表するのみであり、とうてい完全無欠、忠実な表現とは言えない。西洋の写実派の後新ロマン派の作品は観察と想像を兼ねそなえ、

総合的に人生を表現するものである。この一歩進んだ芸術と思想も創作者がいつも考慮に入れておかざるをえないものである。」

これは理想としての新口マン派に対する注意を促したもので、1920年の新口マン派を主張する、最後尾の部分と考える。

- 21：茅盾は、『『对于介绍外国文学的我見』底我的批評』（『民国日報 覚悟』、1921・10・9、『茅盾全集』第18巻）で、西洋文学紹介をめぐる高卓の論議（文学研究はその源から研究すべきであり、紹介もその最初から紹介すべきであるという意見）を、「高卓氏の『遡源』論は現状を顧みない、いたずらな理想論の高唱に過ぎないと言える」とする。

魯迅は、アルツィパーシェフの『労働者シェヴィリョフ』を1920年10月訳し、『小説月報』第12巻7 - 9号、11 - 12号（1921年7 - 9月、11 - 12月）に掲載した。その作品から魯迅が受容した思想の中には、理想の高唱と現実に対する無策についての、シェヴィリョフによるアラジエフ批判があり、また純粋な魂が理想の破滅によって一層の深い幻滅を受けること（オーレンカの例）の指摘があった。（拙稿、「魯迅と『労働者セヴォリョフ』との出会い（試論）上」、『野草』第23号、1979・3、「魯迅と『労働者セヴィリョフ』との出会い（試論）下」、『野草』第24号、1979・10）こうした当時の魯迅、周作人に共通する姿勢が、すなわちいたずらな理想論の高唱ではなく、現実に基づく方策の探求を重視するという姿勢が、茅盾に影響を与えたと考えられる。茅盾は「語体文欧化問題と文学主義問題的討論」（『小説月報』第13巻4号、1922・4・10）において、「文学は個性の表現を重んずる」という徐秋衝の意見について次のように言う。

「もしも文学を『識別』する西洋の主義に基づき、中国の文学を評価するとすれば、中国の文学はどこに位置しているのか。中国で現在よく目に触れる小説 上海各新聞に載る章回体旧小説と新式の短篇小説 とは結局どのようなものなのか。これらの小説に作者の個性があるのだろうか。こうした実際の問題が、実は重要である。ここから検討せずに結論を下したり、いたずらに各主義の善し悪しを空論し、『文学は個性の表現を重んずる』等の耳に快い役に立たぬ話を空唱するのは、言わないほうがましだと思う。」

これは理論の、また理想の空唱をするのではなく、中国の文学の現実に就くべきことの指摘である。また茅盾は「自然主義的論戦 復周贛襄」（『小説月報』第13巻5号、1922・5・10）において、理想の幻滅について次のように言う。

「最も人を苦痛に陥れるのは、醜悪なものに恐るべきことではなくて、理想の失敗であると知らねばならない。理想があればこれとすばらしいと思う人は、いったん真相を見ると、すなわち極めて醜いことが分かると、この幻滅の悲哀、心の打撃は、何よりも厳しい。」

また、厭世主義と享楽主義について、茅盾は「創作的前途」（『小説月報』第12巻7号、1921・7・10）において次のように言う。

「現在の青年の煩悶はすでに極点にまで達している。煩悶の原因は、一方で旧勢力の圧迫があまりにも重く、社会の惰性があまりにも深く、そのため前途の光明がほとんどないと感じさせ、悲観させる。他方では彼ら自身の思想の混乱のためである。（中略）混乱すれば、煩悶することとなり、煩悶によって生ずる悪い結果は、一つは厭世主義であり、一つは享楽主義である。これは両極端である。両極端の間にあるのは、平凡な麻痺した生活である。厭世は正常に反するものであり、享楽は本能的である。」

この分析の仕方には、魯迅の「訳了『工人綏惠略夫』之后」（1921・4・15）と「故郷」（『新青

年』第9巻1号、1921・5)における最後の部分の影響が見られると思われる。前者において魯迅は、アルツイパーシェフが1905年ロシア革命挫折後の青年の動向のなかに、シェヴィリヨフ的な無政府的厭世的「個人主義」とサーニンの虚無的享乐的「個人主義」という二つの傾向を見ていたことを説明する(拙稿、「魯迅の『個人的無治主義』に関する一見解 附 江坂哲也訳『革命物語』序』、名古屋大学『言語文化論集』第10巻1号、1988・10・30)。「故郷」においては、「私のように苦しみ転展と生活する」生き方(厭世主義)、「ほかの人のように苦しみずさんで生活する」生き方(享楽主義)、閩土のような「苦しみ麻痺して生活する」生き方を述べている。

なおその他、矛盾は、上のことと直接には関係がないが、『労働者シェヴィリヨフ』に次の文章の中で言及する。「雑談」(『文学旬刊』第36期、1922・5)、「紹介外国文学作品的目的」(『文学旬刊』第45期、1922・8)、「“半斤”VS“八両”」(『文学旬刊』第48期、1922・9)、「最后一頁」(『小説月報』第13巻7号、1922・7)、『『灰色馬』序』(『文学週報』第95期、1923・11)

上に論じたことから、「初期矛盾の文学観」(佐治俊彦、前掲、1987)が指摘する、陳独秀(「文学革命論」)や周作人(「人的文学」)の延長線上に初期矛盾の「人生を表現し指導する文学」を置くという論に私は賛成する。ただ、同論文の指摘する周作人と矛盾の「大きな隔たり」については、今後の私の課題とする。

- 22: 矛盾は「新文学研究者の責任と努力」(『小説月報』第12巻2号、1921・2・10)で次のように言う。

「凡そ良い西洋文学はすべて紹介すべきだという方法は、理論上は成り立つが、しかし私たちの目的に合わない嫌いがある。」

例えばオスカー・ワイルドの「芸術は最高の実体であり、人生は装飾に過ぎない」という唯美主義は現代の精神に反し、これを無分別に中国に紹介するのは不経済であるとする。

- 23: 「為新文学研究者進一解」(『改造』第3巻1号、1920・9・15、『矛盾全集』第18巻)で矛盾は、ロシアの自然主義文学を挙げ、チェーホフ、ゴーリキー、それを継いだアンドレーエフ、アンドレーエフを継いだアルツイパーシェフに言及する。ロシアの自然主義文学はアンドレーエフにおいて悲観と失望が極点に達し、アルツイパーシェフの文学はエゴイズム(Egoism、唯我主義)の文学であったとする。矛盾によれば、アンドレーエフとアルツイパーシェフはロシア自然主義文学の系統に属し、その末裔である。

- 24: 「矛盾初期文芸思想の形成と発展(3)」(青野繁治、『野草』第34号、1984・9・1)が指摘する、1921年から始まる『小説月報』における損なわれた民族、弱小民族の文学の紹介も、矛盾の新たな姿勢に基づく一環として考えられる。同論文は次のように指摘する。

「『小説月報』第12巻第10号『被損害民族的文学号』の『引言』で、彼はこの種の文学を研究する理由を次のように述べている。『(中略)彼らの中の損害を被って下に向いた魂は我々を感動させる。なぜなら我々自身も同じく不合理な伝統思想や制度の犠牲者であることを悲しんでいるから。彼らの中の損害を被っても向上に向う魂はそれ以上に我々を感動させる。なぜならそれによって我々は人間性の砂礫の中にも精製された金があることをこれまで以上に確信し、前途の暗闇の背後が光明にほかならないことをこれまで以上に確信するから。』沈雁冰のこの言葉は『被損害民族』の文学を中国の社会状況と重ねあわせて読み、そこに救いの道を模索しようという態度の表現であり、それを新浪漫主義の作品の中に求めようとした1920年頃の態度と

基本的に変わっていない。」

青野氏の言うように、表面的には似た態度と言える。しかし一方は、主として西洋文学思潮進化史に基づいて、新口マン主義の中にあるべき理想・光明を見ようとしたのであり、他方は、中国の現実について認識を深めるために、同じ「損なわれた民族」の文学の中に虐げられた民衆の悲しみと、それにもかかわらず向上に向かう魂を見つめ、そこから光明を見ようとする。最初から理想があるのではなく、まず中国の現実認識に基づいて、構想を立てようとする点において、またもしも有るものとすれば、現実の中から光明を見出そうとする点において、両者には違いがあるのではないか、と私は考える。

25：「評四、五、六月的創作」では「7巻5号」とするが、実際は第8巻1号である。

26：茅盾は、「社会背景と創作」(『小説月報』第12巻7号、1921・7・10)で次のように言う。

「このような時代を反映する創作は現在なお見ることができない。大成功したものがなければ、こうした意図の試作さえもまれである。この点から考えると、創作家は眼前の社会背景についてあまりにも軽視しているようだ。中国新文学は準備期にあり、勢いそれほど成功した創作もありえない。この時期的な関係がもとより一つの原因である。しかし最大の原因は創作家自身の環境である。国内で小説を創作する人は大部分勉強し学問研究する人であり、第四階級社会〔労働者の社会〕での経験がない。(中略)そのため苦難の多い社会背景を反映する小説は出現しえない。」

27：茅盾は周作人宛て書簡(1921・8・3、『茅盾全集 書信一集』第36巻、人民文学出版社、1997)で次のように言う。

「『小説月報』は毎月外からの投稿(たいていは知らない人)を受け取り、いつも50篇以上で、長篇も短篇もあります。しかし良いものは結局得難く、それらにはいくつかの共通の欠点があります。(一)描写する事柄状況が、本人も経験したことのない初めてのものである。(二)創作しようとして創作しており、印象が深まり言わずにはおれないところがあって、書いたものではない。(三)客観的観察法を基礎とすることができていない。(四)人物だけを重視して境遇を軽視したり、境遇だけを重視して人物を軽視してしまう。一篇の中の境遇と人物に関係が生ずることが少なく、読者が読後、この境遇があればこそ、こうした人が生まれるのだろうと感ずることができない。(中略)こうした普遍的な欠点は自然主義によってだけ治癒することができると思います。近頃、自然主義は中国において一年以上提唱し研究する必要があると思っています。将来の創作が旧来の『風花雪月』の旧套に復帰しないように願っています。」

茅盾は、自然主義に対する、期限付きの提唱と研究の必要性を述べる。

28：茅盾は「創作的前途」(『小説月報』第12巻7号、1921・7・10)で煩悶する中国の青年の現状を取りあげ次のように言う。

「青年の煩悶、煩悶の後の動向、動向の予兆……これらはみな現在重要な問題であり、文学作品の中に表現されるべきである。しかも表現されるばかりでなくて、光明の路を煩悶する者に導き指し示し、新しい信頼と新しい理想を彼らの胸中に再びとどろかせねばならない。」

しかも文学の使命はこの煩悶を訴えて人々の感情を疎通させる。そうした文学の背景は全人類の背景であり、訴える情感は全人類共通の情感である、とする。

このような新口マン主義的思考が沈雁冰の内面に存在し、それは段々と底層流として沈みつつあったが、このような形で時に浮上したものと思われる。ただ時として現れたこの新口マン主義的思考も、当時の青年の煩悶という現実に基づいている。

29：茅盾は、「自然主義的懐疑と解答 復周志伊」(『小説月報』第13巻6号、1922・6・10)では次のように言う。

「周啓明氏は昨年秋私に手紙をくれて、『世の中でもっばら獸性を見つけたす自然派は、中国人がそれを見れば、害を受けやすい』、と言う。しかし周氏はまた自然主義の技術によって中国現代の創作界の欠点を直すことに賛成した。私自身の現在の見解は、私たちが自然主義を採り入れようとするのは、決して、必ずしもすべての点で自然主義に学ぼうとするものではないと考える。自然主義派文学の含む人生観から言えば、まことに中国の青年に良くないかも知れない。しかし私たちが今注目するのは人生観としての自然主義ではなく、文学としての自然主義である。私たちが採用しようとするのは、自然主義派の技術上の長所である。」

茅盾は、自然主義文学が人生の暗部をもっばら描写することにより、中国の青年を失望落胆させるとしても、むしろ現実を直視して、人生とまともに向き合う自然主義文学を評価する。また真実を描写しようとする描写方法、技術上の長所を学ぼうとする。

この問題に関して、「茅盾初期文芸思想の形成と発展(4)」(青野繁治、前掲、1985)は、1921年茅盾が提唱する中国の自然主義は「人を失望させる」自然主義ではなかった。その内容は新口マン主義と未分化であったとする。私は、茅盾が当時の文学を改革する対症の良薬として自然主義を提唱したのであり、自然主義がたとえ人に失望をもたらすとしても、その正負の両面の功罪を秤量し認識したうえで提唱したものであった、と考える。

「鄭振鐸の『血と涙の文学』提唱と費覺天の『革命的文学』論 五四退潮期の文学状況(二)」(尾崎文昭、前掲、1989)は次のように論ずる。

「効用論に関して、一度、周作人は手紙で意見を言ったらしく、茅盾は返事(21年10月22日)で『文芸が社会を突き動かすのは万にもできないことであるとの先生の御論は、拙意と正に一致するものです』と書いてもいた。本心ではなくともそう書かずにはいられない心理的力関係にあったと見てよからう。」

同論文は、「文芸が社会を突き動かすのは万にもできないことである」という周作人の「効用論」否定に、茅盾が賛成したことを指摘する。しかし原文は「文芸遷就社会、万不能辦到」(『茅盾全集』第36巻、前掲)である。この意味は、1921年10月12日付け周作人宛て書簡の内容からしても、「文芸が社会に妥協することは、決して行ってはならない」という意味であり、「効用論」の否定に関することではないと思われる。

30：茅盾は、「自動文芸刊物的需要」(『文学旬刊』第72期、1923・5・2)で次のように言う。

「中国の一般の人には文学についての正確な觀念がなく、とりわけ新文学の意義をあまり理解していない。彼らは新文学の特別な点は白話を用いることにあると思ひ、そのためおよそ白話で書かれた小説をすべて新文学と見なす。そのため市場に氾濫する 小説職人 の作品を新文学と見なしてしまう。」

茅盾は白話を断固として擁護しながらも、新文学と、白話で書かれた旧派文学を明確に区別している。

31：「茅盾与自然主義」(呂効平等、前掲、1983)は、茅盾のこの時期における、「実際から出発する思想方法」について指摘する。また、中国の当時の歴史的社会的条件下で、自然主義を提唱したことの意味を評価する。また、「沈雁冰在 五四 時期的理論功績」(劉納、前掲、1988)も、中国の当時の歴史的社会的条件(文学的環境)の下で、茅盾が行った文芸理論活動を高く評価する。

32：後茅盾は、「複雑而緊張の生活、学習与闘争」（『我走過的道路』上冊、生活・讀書・新知三聯書店、1981・8）で回顧し次のように言う。

「文章の結論は次のように認識している。礼拝六派 が今日小市民に対してなお広範な影響力を持っており、現在文学を先鋒とする新文化運動が前進するうえにおいて最大の障害となっている。まず『この暗黒勢力を取り除く』ことが必要である。そして新文学を発展させ、その読者に、青年学生以外にも、小市民階層を引きつけようとするならば、自然主義を提唱することが目前の必要事である。」

この回顧部分では、ほとんどが旧派文学、礼拝六派 との闘争にあてられており、最後に、上のように若干自然主義に触れるにすぎない。

33：茅盾は張聞天宛て書簡（1922・4・6、『茅盾全集』第36巻、前掲）で、ロマン・ロランのキリスト教会批判について述べ、ロマン・ロランの意見に賛同しつつ、次のように言う。

「ロランはまた真理を深く愛する人です。“Jean Christophe”で描く理想の人物は真理を深く愛する者です。しかし近代の教会の人は、口では 真理 を言いながら、実際には毎日真理を遮り覆っています。」

1922年4月6日の段階で、ロマン・ロランとその作品『ジャン・クリストフ』に対する評価が、すなわち新ロマン主義の作者と作品に対する評価が、この場合も高かったことが分かる。ゆえに本文で述べたように、私は茅盾の評論活動において新ロマン主義が底層流として後景に退き、そして茅盾の内面に沈潜したと考える。茅盾は自己の内面の問題と、中国の現実にとってどのような文学思潮（創作方法）が必要なのかという問題を、この場合合理的に区別して考えていたと思われる。

「茅盾の自然主義受容についての一考察」（南雲智、前掲、1973）は、1920年頃から1922年にかけて二つの文学思潮の交互の出現という事実を指摘する。ただ、1922年再び自然主義が提唱されるとき、「社会背景と方法」（69頁）とを分離させれば、南雲氏の言うその宿命論などのマイナス面は解消するとするのだろうか。なぜ氏の言う「社会背景の反映」（65頁）という自然主義のマイナス面が、この場合問題とならなくなるのだろうか。私にとって同論文の、事実の説明が分かりにくかった。